川崎医療福祉学会誌　Vol. 28　No. 1　2018　77－87

原　著

大学生のインターネット利用動機と インターネット依存傾向の関係 ―自己制御および孤独感との交互作用を含めて―

澤井智哉[*1]　福岡欣治[*2]

要　　約

スマートフォン等の携帯機器により，インターネットは時間･場所を問わず利用できる状況にある．本研究では，自己制御能力の低さと孤独感の高さが，特定のインターネット利用動機と結びつく場合に，インターネットへの依存的な利用傾向をいっそう強めると仮説した．利用動機は，他者とのコミュニケーションを求めるコミュニケーション志向とコンテンツを楽しむコンテンツ志向に分類した．大学生を対象とした質問紙調査をおこない，不備なく回答した361名のデータを分析した．相関分析の結果，孤独感の高さとコンテンツ志向に加え，特に自己制御能力の低さとコミュニケーション志向がインターネット依存傾向と強く関連していた．自己制御能力は孤独感およびコミュニケーション志向と負の相関があった．他方，自己制御能力の低さとコンテンツ志向，孤独感の高さとコミュニケーション志向の相関はほぼゼロであった．そこで，階層的重回帰分析により，インターネット依存傾向に対する自己制御能力とコンテンツ志向の交互作用，孤独感とコミュニケーション志向の交互作用の影響を調べた．その結果，自己制御能力とコンテンツ志向の交互作用が有意であり，自己制御能力が低い人では，コンテンツ志向が強まるほどインターネット依存傾向が高くなるという関係が，自己制御能力の高い人よりも顕著にみられた．インターネットの依存的利用を防ぐために，自己制御能力の向上が重要であると考えられる．

1．緒言

1.1　はじめに

近年，依存的なインターネット利用による重大な社会的及び健康的問題が話題になりつつある[1)]．日本では2000年代頃からインターネット依存症関連の論文が散見されるようになっており[2)]，厚生労働省研究班による調査[3)]では，日本の中高生約10万人に対する調査から，全国で約52万人が「インターネットの病的使用が疑われる」水準にあると推計されている．

他方，現在特に若い世代においては，スマートフォンによるインターネット利用が顕著である．平成29年版『情報通信白書』[4)]によると，2010年に10％未満であったスマートフォンの世帯保有率は70％を超え，特に大学生を含む若い世代の個人保有率は，13-19歳で81.4％，20代では94.1％に上る．そして，10代・20代のスマートフォン利用者は，平均2時間以上をスマートフォンによるインターネット利用に費やしている．2014年に行われた高校生15191名を対象とする調査[5)]でも，1日あたりの平均インターネット利用時間は，スマートフォン（及びフィーチャーフォン）で161.9分，パソコンで38.8分，タブレット端末で12.5分であったと報告されている．

スマートフォンという携帯機器の特徴は，豊富な機能をもつインターネットを「いつ，どこでも利用できる」ことである．この場合，利用したいという動機をすぐに満たすことができるが故に，ますます過度な利用が生じてしまうことが懸念される．インターネット依存の心理社会的影響とリスク要因に関する研究をレビューした岡安[6)]は，時と場所を選ば

＊1 川崎医療福祉大学大学院　医療福祉学研究科　臨床心理学専攻
（※2018年4月以降の所属：独立行政法人国立病院機構賀茂精神医療センター）
＊2 川崎医療福祉大学　医療福祉学部　臨床心理学科
（連絡先）福岡欣治　〒701-0193　倉敷市松島288　川崎医療福祉大学
E-mail : fukuoka@mw.kawasaki-m.ac.jp

ずインターネットが利用できる環境によって，インターネット依存のリスクは益々高くなっていると述べている．

本研究はこのような背景をふまえ，インターネットのリスク要因が特定の利用動機と結びつくことによって依存傾向を一層強める可能性について検討し，インターネット依存が助長されるメカニズムについての知見を増加させることを目指すものである．

1．2　インターネット依存

Young[7] はインターネットへの没頭が，薬物依存やギャンブル依存と同様の中毒性を持ち得ること，単なる習慣ではなくそこから抜け出すことが困難であるような深刻な症状を示すケースがあることを指摘し，それを「Internet addiction（インターネット中毒／インターネット依存）」と呼んだ．将来インターネット依存者が増えることを Young が警告したように，この10数年でインターネットは急速に普及し，あわせてインターネット依存者も急増した．日本国内に限っても，近年数多くの総論あるいはレビュー論文がインターネット依存を巡って刊行されている状況にある[1,2,8]．

インターネット依存とは，制御してインターネットを使用（利用）することができない状態であり，かつ何らかの障害，悪影響が起きる状態である[1]．Young[7]によれば，依存状態には，(1)過剰使用（しばしば時間を忘れ，基本的な活動の無視と関連している），(2)離脱（インターネット依存ができない時の怒り・緊張状態，抑うつ状態を含む），(3)耐性（よりよいコンピューター設備，ソフトウェア，より多くの時間を必要とすることを含む），(4)悪影響，の4つの構成要素を持つとされている．そうした依存状態が続くことは，メンタルヘルスを損なうとともに社会的機能を低下させることが報告されている．中山と樋口[2]によれば，インターネットに費やす時間の増加によって，勉強やスポーツ，家族や友人と交流する時間が極端に減少しがちになっていく．健康面への重大な問題につながりやすいのが睡眠時間の減少であり，起床が困難になる，結果遅刻や欠席を繰り返す，生活のリズムが崩れ体調も崩すなど，社会生活の問題につながる．その他にもオンラインゲームの重課金，食生活の偏り，家族からの深刻な対立・孤立など，アルコール・薬物依存や病的賭博といった他の依存症と同様の問題を呈することがある．

1．3　インターネット利用動機

インターネットには，様々なサービスが存在する．従来から，どのようなサービスをなぜ利用するか，という観点からインターネット利用動機の検討が試みられてきた[9]．インターネット利用動機は，利用行動やその結果に影響を与えることが指摘されている[10,11]．テレビなどのマスメディアの受容，すなわち利用者によるマスメディアの受け入れについては，「利用と満足」研究の流れがある[12]．そこでは，単なるメッセージの受け手として利用者を位置づけるのではなく，コミュニケーションの内容およびメディアそれ自体を人々がどのように利用し，自らの生活の中で主体的に意味づけしていくかに関心が持たれてきた[12]．これをインターネットに援用した研究では，使用それ自体および使用を通して利益が得られるというコンテンツ利用への満足[13]とともに，他者とつながるという社会的な利用や対人的な有用性による満足[14,15]が指摘されている．西村と遠藤[16]は，高校生を対象にした利用動機の調査で「自己表現」「娯楽的使用」「メールでの交流」「知識増大」の4因子を抽出しているが，因子間相関は「自己表現」と「メールでの交流」，「娯楽的使用」と「知識増大」の間でそれぞれ高く，前者は他者とのコミュニケーション，後者はネット上のコンテンツ消費に対する動機であるといえる．なお，これと同様の結果は，ツイッターの利用動機を分析した柏原[17]においても見出されている．

他方，インターネット依存の観点からみると，インターネット上の特定のサービスへの注目や使用は，インターネットという嗜癖対象に包含される下位の嗜癖対象と考えることができる．このような下位の嗜癖対象であるサービスの種類によって，個々人の志向性は異なる[18]．インターネット依存傾向を持つ21人の若者に対するインタビュー調査[19]によれば，依存に至る過程や依存状態の特徴が，利用するサービスによって異なっていた．大野ら[19]は依存の特徴を，リアルタイム型（チャットやゲームなどリアルタイムのコミュニケーションを求める），メッセージ型（SNS の書き込みなどメッセージの交換を求める），コンテンツ型（記事や動画などネット上のコンテンツ，受信のみで成立する一方向サービスへの依存）に分類している．このうち，リアルタイム型とメッセージ型は，何らかの形で他者と関わることを目的とするため，コミュニケーション志向と言える．コンテンツ型はその名の通りコンテンツ消費を目的としている．

インターネット利用に関する一般的な利用動機の研究からも，またインターネット依存者が依存に至る過程を調べた研究からも，他者とのつながりや相互作用といったコミュニケーションと，ネット上のコンテンツそれ自体から満足が得られること，の2つが主要な利用動機として想定される．

1．4　孤独感と自己制御能力―インターネット依存の主要なリスク要因

インターネット依存が問題視されるにつれて，インターネット依存の生起プロセスについても多くの研究が行われている．本研究では，先行研究の中で取り上げられてきたインターネット依存の主要なリスク要因として，インターネット利用動機との関連から，特に孤独感と自己制御能力の2つに注目する．

1．4．1　孤独感とインターネット依存

インターネットの主要な機能の1つは，他者とのコミュニケーションを図ることにある．そのため，対人関係要因とインターネット依存との関連性が検討されてきた．そのなかでも，Morahan-Martin & Schumacher[20]や Caplan[21]をはじめとする多くの研究によって，孤独感がインターネット依存の重要なリスク要因であることが報告されている．孤独感の背景にはソーシャルスキルの欠如があると考えられるが，対人関係での失敗が不安や失望感，疎外感を増大させ，対人関係からの回避につながり，孤独感が生み出される．そうした現実社会での対人関係に満足感を得られず孤独感が高まるほど，代用としてオンラインでの人間関係を求める孤独感を埋めようとすることから，依存が引き起こされるという[6]．また上記のインターネット環境の変化に加え，Twitter を始めとする SNS の普及から，よりオンラインでの対人関係に頼りやすい状況となったことが考えられる．

1．4．2　自己制御能力とインターネットの衝動的利用

常に利用できる状態であるということは，常に注意を向けることができるということであり，利用への欲求が生じるとすぐにこれを満たすことができる．この手軽さのために自覚もなく利用を始めてしまい，インターネットから注意を逸らし別の行動をとることを困難にする．こうした衝動的な欲求は，個人のインターネット依存への脆弱性の1つであると考えられる．現在の環境では，インターネット機器を携帯し常に使えるため，以前よりも更に衝動的利用を実行しやすいといえる．そのため，衝動性を抑える自己制御の能力が必要となることが考えられる．行動と注意を制御し衝動性を抑える自己制御の能力として，Rothbart et al.[22]のエフォートフル・コントロールが挙げられる．伊藤と北島[23]は，インターネット依存（嗜癖傾向）の特徴である衝動性と注意の切り替えの困難さに注目し，これらに関連する要因であるエフォートフル・コントロールとの関係を検証した．その結果，エフォートフル・コントロールがインターネット嗜癖傾向を直接低減する要因であることが示されている．

1．5　本研究の問題意識と目的

本研究では，「いつ，どこでも利用できる」というスマートフォン普及の進んだ現在のインターネット環境をふまえ，特にスマートフォンによるインターネット利用率の高い集団としての大学生を対象に，インターネットの利用動機と従来から指摘されてきたリスク要因との交互作用的な影響の可能性に注目する．利用動機は，他者とのインターネットを介した情報のやり取りを目的とするコミュニケーション志向と，それ以外のインターネット上の情報やサービスを閲覧・使用することを目的としたコンテンツ志向の2つを想定する．リスク要因は，現実の対人関係に満足が得られないことから生じる孤独感と，不適切な使用を控え適度な範囲の利用に関係していると思われる個人の自己制御を取り上げる．

本研究では，インターネット利用動機としてのコミュニケーション志向とコンテンツ志向とが，それぞれ孤独感，自己制御というリスク要因と結びついた際の依存傾向への影響について検討する．これによって，インターネット依存が助長されるメカニズムについて新たな知見を提供することを目指す．本研究では，現実での対人関係の代用など，孤独感の高さがコミュニケーション志向と結びついたとき，自己制御の低さがコンテンツ志向の利用と結びついたとき，よりインターネット依存傾向が高まると考えられる．

2．方法

2．1　調査対象者

A 県内の大学生458名を対象に調査を実施し，主要な変数への記入不備を除く362名（男性135名，女性227名，平均年齢19.3歳）の回答を使用した（有効回答率79%）．なお，分析対象者のうち，260名が医療・福祉系の学科に，101名が情報系の学科に所属していた．1名が学科について無記名であったため，学科ごとに分析を行なう際のみ，無記名の1名を除いた361名を分析対象とした．

2．2　測定内容

2．2．1　インターネット利用状況

インターネット使用の有無，1週間あたりの使用日数，1日あたりの使用時間，利用している主な機器の種類（該当するものを複数回答；表2参照）について回答を求めた．

2．2．2　インターネット利用動機

コミュニケーション志向・コンテンツ志向について測定するために，西村と遠藤[16]のインターネット利用動機尺度を一部変更し使用した．この尺度は「自

己表現」「娯楽的利用」「メールでの交流」「知識増大」（項目数はそれぞれ5，5，4，3）の計16項目からなる．このうち「メールでの交流」はインターネットを介した連絡の利用に関する項目からなるが，現実にはLINEなど連絡機能をもつサービスはインターネット上に多数存在する．そのため，この因子に該当する各質問項目から「メール」という文言を削除し，インターネット上で利用者が相互に交流できるサービスを，回答者が自由に想定して答えられるようにした．これらの因子のうち，「自己表現」と「メールでの交流」の項目はコミュニケーション志向に，「娯楽的使用」と「知識増大」の項目はコンテンツ志向に分類されると想定した．各項目について「1：全く当てはまらない」から「4：とてもよく当てはまる」の4件法で回答を得た．

２．２．３　インターネット依存傾向

Young[7]の作成したインターネット依存度テスト（Internet Addiction Test: IAT）を久里浜医療センターが翻訳した日本語版を使用した．20項目からなり，「1：全くない」から「5：いつもある」の5件法で回答を得た．合計得点によって，39点以下は依存傾向が低く，40～69点は依存傾向があり，70点以上は高い依存傾向があると判断される．

２．２．４　自己制御能力

行動を抑制する個人の自己制御能力の指標として，成人用エフォートフル・コントロール尺度日本語版[24]を使用した．尺度は「行動抑制の制御」11項目，「行動始発の制御」12項目，「注意の制御」12項目，計35項目からなり，「1：当てはまらない」から「4：当てはまる」の4件法で回答を得た．伊藤と北島[23]の先行研究と同様に，全体の合計点を変数として使用した．

２．２．５　孤独感

改訂版UCLA孤独感尺度[25]を使用した．20項目からなり，「私は，他の人たちから孤立している．」「私には，頼りにできる人がだれもいない．」といった質問に対し「1：けっして感じない」から「4：たびたび感じる」の4件法で回答を得た．

２．３　手続き

2017年9月中旬から10月上旬にかけて，授業ないしガイダンスの終了後に，出席者に説明をおこない質問紙を配布した．インターネット利用という研究主題，ならびに所属学科による学生の志向性の違いを考慮し，情報系学科でも調査を実施した．配布後その場で回答を求め，各自で回収用の箱に投函してもらった．回答の所要時間は10分程度であった．

２．４　倫理的配慮

本研究の実施にあたり，川崎医療福祉大学倫理委員会の了承を得た（承認番号17-061）．事前に回答者の所属する学科の学科長より書面にて同意を得た．回答者に対する協力依頼の文書には，回答は研究以外の目的で使用しないこと，個人が特定されることはないこと，強制ではなく白紙で提出しても不利益を生じないことを明記した．それらを口頭でも改めて説明し，質問紙上に設けた同意欄への記入をもって同意とみなした．

２．５　データ整理と分析方法

統計処理にはIBM SPSS statistics Version 23を使用した．まず，分析対象とするデータを選定し，回答者の基本属性を確認した．次に各尺度について項目毎の度数分布に極端な偏りがないことを確認した後，インターネット利用動機尺度の因子分析を行った．その後，各尺度についてCronbachのα係数により信頼性を確認し，尺度毎の平均値と標準偏差を算出し，分析対象の基本属性による違いを各変数の平均値を比較して確認した．さらに，尺度間の相関関係を確認した後，インターネット依存を従属変数とし交互作用項を含む重回帰分析により，仮説の検討を行った．

３．結果

３．１　インターネット利用状況

表1・表2に集計結果を示す．インターネットの利用の有無について，分析対象者全員がインターネットを利用していた．1週間あたりのインターネット利用日数について312名（全体の86.2％）が毎日使用していた．1日当たりの利用時間については大きな個人差がみられた．機器については，357名（全体の98.6％）がスマートフォンまたは携帯電話を使用していた．パソコンの使用者は137名（37.8％）であった．

３．２　インターネット利用動機の因子分析

各項目の回答分布に極端な偏りがないことを確認

表１　インターネットの使用日数，使用時間

1週間の使用日数			1日当たりの使用時間		
使用日数	人数	（％）	使用時間	人数	（％）
1	3	(0.8)	1時間未満	40	(11.0)
2	3	(0.8)	1～2時間	65	(18.0)
3	6	(1.7)	2～3時間	85	(23.5)
4	9	(2.5)	3～4時間	72	(19.9)
5	21	(5.8)	4～5時間	47	(13.0)
6	8	(2.2)	5～6時間	22	(6.1)
7	312	(86.2)	6時間以上	31	(8.6)

表２　インターネット機器の使用状況

使用機器	人数	使用率(%)
スマートフォン・携帯電話	357	98.6
パソコン(PC)	137	37.8
その他(タブレットPC、ゲーム機など)	6	1.7

注：複数回答による

表３　インターネット利用動機の因子分析

	質問項目	因子1	因子2	共通性
7	気持ちや感情を表現するため	**.79**	.01	.60
11	考えを人に知ってもらうため	**.77**	-.15	.55
16	自分自身の存在を知ってもらうため	**.75**	-.11	.54
6	寂しさを紛らわせるため	**.57**	.11	.63
13	悩みをわすれるため	**.55**	.12	.35
15	色々な人とやり取りするため	**.48**	.25	.35
5	娯楽のため	-.11	**.83**	.66
14	面白いから	.08	**.67**	.48
9	時間をつぶすため	.04	**.61**	.38
8	情報を探索するため	-.05	**.55**	.29
4	知識を広げるため	.11	**.42**	.21
	因子寄与率	28.05	15.69	
	因子間相関		.24	

因子1：コミュニケーション志向, 因子2：コンテンツ志向

した後，因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行った．固有値が1以上の因子は4つ抽出されたが，解釈可能性から2因子とした．因子負荷量の低い4項目（「1：新しい考えを得るため」「2：刺激を得るため」「3:友人とコミュニケーションを取るため」「10:知人と交流を深めるため」「12：相手が不在でもいつでも連絡が取れるため」）を削除し，表3に示す因子構造を確定した．なお，2因子の累積寄与率は43.7%であった．項目内容にもとづき，第1因子は「自分自身の考えを知って貰うため」や「色々な人とやりとりするため」といった他者との交流を目的とする動機が含まれていたことから，「コミュニケーション志向」と命名した．第2因子は「娯楽のため」「面白いから」など他者との交流を目的としない，インターネットを利用すること自体を楽しむ目的であったことから，「コンテンツ志向」と命名した（表3）．

３．３　各尺度の記述統計量

インターネット利用動機について抽出された2因子（コミュニケーション志向，コンテンツ志向）およびインターネット依存傾向，自己制御，孤独感，精神的健康について，それぞれ Cronbach の α 係数を算出した．コンテンツ志向の α 係数は他の変数と比べ若干低い数値（α = .76）であったが，分析には耐えうると判断した．各尺度（変数）の α 係数，平均値，標準偏差は表4に示す通りであった．なお，インターネット依存傾向の平均値は約43点であり，これは同尺度では依存傾向が中程度（40～69点）とされる区分に相当する．

３．４　性別及び所属学科の違いによる差の検討

各変数の平均値が性別および所属学科により異なるかどうか，それぞれ t 検定を行った．男女の比較では，男性は女性と比べて孤独感が有意に高かった（男性 M=40.57, SD=9.21, 女性 M=35.00, SD=8.63, $t(360) = 5.78$, $p<.01$）．学科別の比較では，情報系学科は医療・福祉系学科と比べて孤独感が有意に高く（情報系 M=38.99, SD=10.11, 医療・福祉系 M=36.34, SD=8.81, $t(360)=2.46$, $p<.01$），精神的健康が有意に高かった（情報系 M=21.22, SD=5.77, 医療・福祉系 M=19.33, SD=5.30, $t(360)=2.96$, $p<.01$）．しかし，インターネット依存傾向と利用動機の2尺度においては，これらによる差異は認められなかった．

３．５　変数間の相関関係

変数間の関係をみるために，単相関係数（ピアソンの積率相関係数）を算出した．なお，性別及び学科の違いにより一部の変数に平均値の有意差が認められたため男女別，学科別の単相関係数も念のため算出したが，回答者全体での結果と基本的に同様で

表4　各変数のα係数，記述統計

変数名	α	平均値	標準偏差
インターネット依存傾向	.91	43.21	13.81
孤独感	.91	37.08	9.24
自己制御能力	.86	90.66	11.8
利用動機:コミュニケーション志向	.82	13.15	3.94
利用動機:コンテンツ志向	.76	17.29	2.53

表5　変数間の単相関係数

変数名	2	3	4	5
1. インターネット依存傾向	.22 **	−.45 **	.47 **	.23 **
2. 孤独感		−.23 **	−.02	−.17 **
3. 自己制御能力			−.23 **	−.08
4. 利用動機:コミュニケーション志向				.26 **
5. 利用動機:コンテンツ志向				

**p<.01

表6　コミュニケーション志向と孤独感の交互作用の検討

	β	R^2(調整済みR^2)
step1		.28(.28)
孤独感	.24 **	
コミュニケーション志向	.48 **	
step2		.28(.28)
孤独感	.24 **	
コミュニケーション志向	.48 **	
孤独感*コミュニケーション志向	.00	
R^2の増分＝.00		

**p<.01

あったため，本稿では全体での結果のみを提示する（表5）．インターネット依存傾向と各尺度との間に有意な相関が示されたが，コミュニケーション志向と孤独感，コンテンツ志向と自己制御能力の間に相関は認められなかった．なお，男女別，学科別においても同様に，コミュニケーション志向と孤独感，コンテンツ志向と自己制御能力の間に相関は認められなかった．

３．６　利用動機とリスク要因の違いによるインターネット依存傾向の変化

コミュニケーション志向と孤独感，コンテンツ志向と自己制御能力の間に相関が認められなかったことをふまえ，これらの変数による交互作用の影響を検討した．交互作用項の作成にあたっては，交互作用項を構成する2変数について事前にセンタリングの処理（個々人の得点から平均値を減ずることによって，全体の平均値をゼロとする）[26]をおこなった．

まず，インターネット依存傾向を基準変数とし，孤独感とコミュニケーション志向，これら2つの交互作用項を説明変数として，階層的重回帰分析を行った．第1ステップとして孤独感とコミュニケーション志向を投入し，第2ステップとして交互作用項を投入した．その結果，第2ステップにおいて交互作用項を投入した際の決定係数（R^2）の増分は有意でなく，コミュニケーション志向と孤独感の間に交互作用は認められなかった（表6）．

次に，インターネット依存傾向を基準変数とし，自己制御能力とコンテンツ志向，これら2つの交互作用項を説明変数として，階層的重回帰分析を行った．第1ステップとして自己制御能力とコンテンツ志向を投入し，第2ステップとして交互作用項を投入した．その結果，第2ステップにおいて交互作用項を投入した際の決定係数（R^2）の増分は有意であり，自己制御能力とコンテンツ志向の間に交互作

表7　コンテンツ志向と自己制御能力の交互作用の検討

	β	R^2(調整済みR^2)
step1		.24(.24)
自己制御能力	-.44 **	
コンテンツ志向	.20 **	
step2		
自己制御能力	-.38 **	.26(.26)
コンテンツ志向	.24 **	
自己制御能力*コンテンツ志向	-.15 **	
R^2の増分＝.02**	F (3,361)=44.21,P<.01	

** p<.01

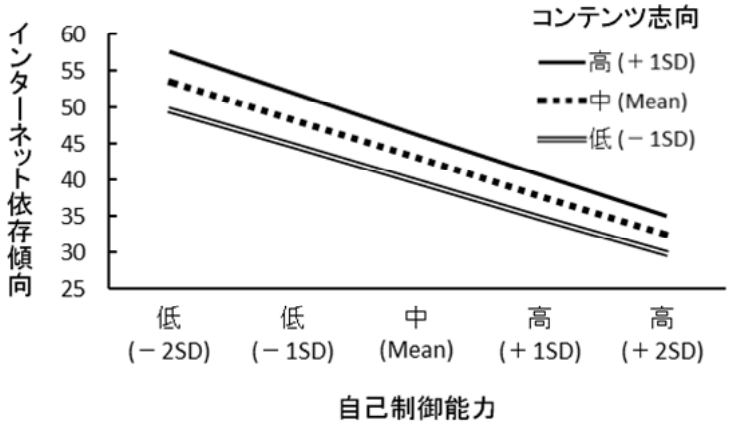

図1　コンテンツ志向と自己制御能力の違いによるインターネット依存傾向の回帰直線

用が認められた（表7）．この交互作用を視覚的に表現するため，コンテンツ志向に平均±1SD の値を，自己制御能力に平均値±1SD, ±2SD の値を代入し，インターネット依存傾向の回帰直線を求めたところ，自己制御能力が低くコンテンツ志向が高い際にインターネット依存傾向が高まっていることが見いだされた（図1）．

４．考察

４．１　分析対象者のインターネット使用状況および個人属性について

本研究の対象者は全員がインターネットを利用しており，86.2％が「毎日」と回答していた．また，全体の98.6％がスマートフォンを利用していた．これらの結果は総務省[4]の調査結果と大きく外れるものではない．そのため, 本研究の対象者は, インターネット利用に関して，一般的な大学生の特徴を共有していると思われる．

本研究では，回答者の所属学科による違いを考慮した．IT 関係の知識を学び日常的にコンピュータを利用する情報系学科の学生と他の学科の学生を対象としたが，インターネット利用動機及びインターネット依存傾向について，所属学科による違いは見られなかった．その意味でも，今回の対象者は一般的な大学生と大きな違いはなかったと考えられる．

４．２　インターネット利用動機の分類について

本研究ではインターネット利用動機をコミュニケーション志向とコンテンツ志向の2側面から捉えることとし，因子分析によりこれらに対応する2因子を抽出した. 第1因子の「コミュニケーション志向」は他者に対して考えや気持ちを表現することについての項目が多く含まれており，大野ら[19]の分類におけるメッセージ型に該当すると考えられる．第2因子の「コンテンツ志向」は娯楽のため, 面白いから, 時間を潰すためなどインターネットを利用すること自体が目的の項目と情報探索を目的とした項目で構成されている．インターネット上に存在するものを活用しようとしており，他者との関わりや情報の発信は行わず受信のみで成立する目的であることから，大野ら[19]の分類におけるコンテンツ型と同質のものであることが考えられる．これら2因子は，「利用と満足」研究の流れを組むインターネット利用動機の研究から導かれる，他者とつながるという社交的な利用や対人的な有用性による満足[14,15]およびコ

ンテンツ利用への満足[13]と対応するものであり，元とした西村と遠藤[16]の分析とも矛盾しない結果であると言える．

4．3　コミュニケーション志向及び孤独感とインターネット依存傾向の関連

本研究の分析では，孤独感とコミュニケーション志向の間に相関がなく，かつインターネット依存に対する交互作用項の寄与も有意ではなかった．しかし，孤独感とコミュニケーション志向はそれぞれ独立にインターネット依存と関連しており，かつコミュニケーション志向において高い相関が示された．これは，少なくとも本研究の対象者においては，孤独感がインターネットに対するコミュニケーション志向的な利用動機の前提になく，かつ，コミュニケーション志向自体がインターネットの依存的な利用をもたらす可能性が高いことを意味する．インターネット依存のリスク要因に関する従来の研究では，現実社会での対人関係に満足感を得られないため，代用としてオンラインでの人間関係を求めるとされてきた[6]．しかし，孤独であるか否かにかかわらず，他者とコミュニケーションを図ることを好む人もいるであろう．そして，現実社会での人間関係が充実すれば，知人との連絡の取り合いや交流のためにインターネットを介したやり取りは多くなっていく．「いつ，どこでも」インターネットが利用できる環境においては，現実の対人関係に不満がなくてもインターネットを介して他者とつながることを求め，それが極めて容易に実現してしまうが故に，依存的な利用が助長されるのかもしれない．もちろん，これがスマートフォン自体のインターネット依存の一般的な特徴であると言えるかどうかは，本研究のみでは明らかでない．利用動機を含めたインターネット依存傾向の研究を蓄積することによって検証される問題であると考えられる．

4．4　コンテンツ志向と自己制御能力によるインターネット依存傾向の変化

分析の結果より，コンテンツ志向と自己制御能力に交互作用が認められ，自己制御能力が低くコンテンツ志向が高い際にインターネット依存傾向が高まっていることが見いだされた．本研究で明らかとなったインターネット依存傾向の変化は低い数値であったが，インターネット依存のリスク要因である自己制御能力の低さは，インターネット上のコンテンツを消費することによって満足を得ようとする動機と結びついたとき，よりいっそうインターネット依存傾向を高めることが示唆された．本研究で自己制御能力の指標としたエフォートフル・コントロールは，行動を制御し，衝動的な欲求から注意を逸らす能力である．伊藤と北島[23]の研究で示されたように，エフォートフル・コントロールは「今すぐにインターネットを利用したい」という衝動的利用を抑制する．また，切り替えが困難な「インターネットを使用し続けたい」という状態から注意を逸らすことができ，過度な使用につながらないためインターネット依存の抑制要因として働く．現在のインターネット環境は，インターネット機器を常に携帯し，時間・場所を問わずに使用できるため，以前よりも更に衝動的利用を実行しやすいといえる．また，昨今のインターネット上のコンテンツの多くは，継続的な利用を高めるために日々新しいものが生み出され，更新され続けていく．こうした常に更新され続けるSNSやソーシャルゲーム，ネットニュース，画像・動画投稿サイトといった娯楽や情報探索などを追い続けて行ってしまう．エフォートフル・コントロールが低い人物において，いつでもインターネットが利用できる環境によって衝動性が高くなり，インターネット上のコンテンツを消費することから注意を逸らすことが出来なくなるというプロセスを辿り，インターネットの依存的な利用につながると考えられる．

4．5　本研究の問題点

本研究においては因子分析を元にインターネット利用動機を分類し，利用動機の違いを検討したが，分類の妥当性には一定の限界がある．元とした西村と遠藤[16]の尺度は4因子構造であり，それを解釈可能性の観点から2因子に集約するという手続きをとった．その結果，因子負荷量の問題から4項目が取り除かれたが，中でも「3:友人とコミュニケーションを取るため」「12：相手が不在でもいつでも連絡が取れるため」という直接的にコミュニケーションを希求する内容を含む項目が最終的な尺度に含められなかった．このことは，今回の分類において，「他者との交流を目的とする動機」であるコミュニケーション志向の測定精度が低下した可能性が考えられる．またコンテンツ志向の内的整合性は，分析に耐えうる数値であると判断したが，他の変数に比べると相対的に低い数値であった．，今後は，インターネット利用動機としてのコミュニケーション志向及びコンテンツ志向をより精密に測定できる尺度を新たに検討し，信頼性及び妥当性を高めていく必要があると考えられる．

4．6　インターネット依存対策に向けて

インターネット環境は年々拡大しており，日本国民においては8割以上が利用している現在[4]において，インターネット依存にいたるリスクは今後ますます高くなっていくと考えられている[6]．本研究の

結果は，孤独感や自己制御能力などに加え，インターネット利用動機が依存的な利用に影響する可能性を示唆している．大野ら[19]が示したようにインターネット依存形態の違いが利用動機と関連するのであれば，今後，インターネット依存の治療や予防のために，個人の依存形態と利用動機の両面から個別的な対策を考えていく必要があると考えられる．また，本研究ではコンテンツ志向と自己制御能力の低さによる交互作用の可能性が示されたが，そもそも自己制御能力自体がインターネットの依存的利用と強く関連していた．伊藤と北島[23]が取り組んでいるように，自己制御能力それ自体を高めるような介入の必要性が，今後ますます重要になっていくと考えられる．

謝　辞

本研究は，第一筆者による平成29年度川崎医療福祉大学大学院修士論文を元に再構成したものの再編集したものである．調査の実施にあたり御協力を下さった医療情報学科および臨床心理学科の先生方，ならびに多くの回答者の皆様に，深く感謝申し上げます．

文　献

1）中山秀紀：若者のインターネット依存．心身医学，**55**(12)，1343-1352，2015.
2）中山秀紀，樋口進：インターネット依存症．精神科，**28**，235-240，2016.
3）大井田隆(研究代表)：未成年の健康問題および生活習慣に関する実態調査．厚生労働省科学研究費補助金循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業平成25年度総括研究報告書，2013.
4）総務省：平成29年版情報通信白書．
http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/h29.html, 2017.（2018.3.30確認）
5）総務省情報通信政策研究所：スマートフォン・アプリ利用とネット依存傾向に関する調査報告書．
http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01iicp01_02000020.html, 2015.（2016.9.26確認）
6）岡安孝宏：インターネット依存の心理社会的影響およびリスク要因に関する研究の動向．明治大学心理社会学研究，**11**，23-45，2015.
7）Young KS：*Caught in the net: How to recognize the signs of internet addiction and winning strategy for recovery.* Wiley，New York，1998.
8）中山秀紀：インターネット使用障害とは．臨床精神医学，**45**(12)，1507-1512，2016.
9）八ッ橋武明：インターネットの利用者タイプと利用満足．社会情報学研究，**8**(2)，65-78，2004.
10）西村洋一：対人不安，インターネット利用，およびインターネットにおける人間関係．社会心理学研究，**19**(2)，124-134，2003.
11）西村洋一：インターネット利用がシャイネスと人間関係に与える影響―インターネット利用に関わる要因を含めた検討―．青山心理学研究，**6**，19-31，2006.
12）ユン　チャンギ：『利用と満足研究』の歴史と現状―ニューメディアにおける「利用と満足研究の可能性」―．東洋大学大学院紀要．社会学研究科，**49**，1-24，2012.
13）Song I，Larose R，Eastin MS and Lin CA：Internet gratifications and Internet addiction: On the uses and abuses of new media. *CyberPsychology & Behavior*，**7**(4)，384-394，2004.
14）Papacharissi Z and Rubin AM：Predictors of Internet use. *Journal of Broadcasting & Eelectronic Media*，**44**(2)，175-196，2000.
15）Stafford TF，Stafford MR and Schkade LL：Determining uses and gratifications for the Internet. *Decision Sciences*，**35**(2)，259-288，2004.
16）西村洋一，遠藤健治：高校生のインターネット利用状況についての基礎的検討―対人不安傾向，性別を要因とした分析―．北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要，**2**，41-53，2009.
17）柏原勤：Twitter の利用動機と利用頻度の関連性―「利用と満足」研究アプローチからの検討―．慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学・心理学・教育学：人間と社会の探究，**72**，89-107，2011.
18）高橋伸彰：「ネット依存者」における志向性と脆弱性．人文論究，**65**，131-149，2016.
19）大野志郎，小室広佐子，橋元良明，小笠原盛浩，堀川祐介：ネット依存の若者たち，21人インタビュー調査．東京大学大学院情報学環情報学研究調査研究編，**27**，101-139，2011.
20）Morahan-Martin J and Schumacher P：Loneliness and social uses of the Internet. *Computers in Human Behavior*，**19**(6)，659-671，2003.
21）Caplan SE：Preference for online social interaction: A theory of problematic Internet use and psychosocial well-

being. *Communication Research*, **30**(6), 625-648, 2003.
22) Rothbart MK, Ahadi SA, Hershey KL and Fisher P：Investigations of temperament at three to seven years: The children's behavior questionnaire. *Child Development*, **72**(5), 1394-1408, 2001.
23) 伊藤麻里，北島正人：インターネット嗜癖傾向の構造と介入に関する検討―気質レベルのセルフコントロールに着目して―. 秋田大学臨床心理相談研究，**11**，9-16，2012.
24) 山形伸二，高橋雄介，繁桝算男，大野裕，木島伸彦：成人用エフォートフル・コントロール尺度日本語版の作成とその信頼性・妥当性の検討．パーソナリティ研究，**14**(1)，30-41，2005.
25) 工藤力, 西川正之：孤独感に関する研究（I）―孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討―．実験社会心理学研究, **22**(2), 99-108，1983.
26) Aiken LS, West SG and Reno RR：*Multiple regression: Testing and interpreting interactions*. Sage, Newbury Park, 1991.

（平成30年6月6日受理）

Relationships between Motives for Using the Internet and Internet Addiction Tendencies in University Students: Interactions between Motives, Self-control, and Loneliness

Tomoya SAWAI and Yoshiharu FUKUOKA

（Accepted Jun. 6, 2018）

Key words : motives for using the Internet, Internet addiction tendencies, self-regulation, loneliness, university students

Abstract

Today, the Internet is available anytime and anywhere through portable devices such as smartphones. The following hypothesis was established: low self-control and high loneliness would increase Internet addiction tendencies based on the motives of the person using the Internet, which were classified as communication-oriented and content-oriented motives. A questionnaire was administered to university students, and data without missing values were analyzed (N=361). The results of correlation analysis indicated that not only high loneliness and content-oriented motives, but also especially low self-control and communication-oriented motives were strongly correlated with the Internet addiction tendency. Moreover, self-control had negative correlations with loneliness and communication-oriented motives. On the other hand, there were no correlations between low self-control abilities and content-oriented motives, as well as between high loneliness and communication-oriented motives. The effects of interactions between self-control and content-oriented motives and interactions between loneliness and communication-oriented motives on Internet addiction tendencies were examined using hierarchical multiple regression analysis. The results indicated significant interactions between self-control abilities and content-oriented motives. Internet addiction tendencies increased more when content-oriented motives increased in people with low compared to high self-control abilities. It is considered important to improve self-control abilities for preventing the addictive use of the Internet.

Correspondence to : Yoshiharu FUKUOKA

Department of Clinical Psychology
Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
E-mail：fukuoka@mw.kawasaki-m.ac.jp
（Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.28, No.1, 2018 77－87）